

藤原家隆の「閑居百首」について

著者	川野 良
雑誌名	清心語文
号	4
ページ	52-61
発行年	2002-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000327/

藤原家隆の「閑居百首」について

川 野 良

一

「閑居百首」は文治三（一一八七）年十一月、藤原定家と藤原家隆がよんだもので、春・秋各二十首、夏・冬・雑各十五首、述懐五首という構成である。雑十五首で家隆は『堀河百首』の雑題二十のうちから十五題（「眺」）「旅」を設けているが、定家にはそれが見られない。

この文治三年は二人とも春に「殷富門院大輔百首」をよみ、秋にはこの「閑居百首」をよむという意欲的な一年であった。

また「閑居百首」は定家が『拾遺愚草』で自ら記しており、当初からの呼称であろう。「閑居」とは、

一般に「閑静な住居」、あるいは「閑適な住み方」を意味するが、閑寂を意味する東洋人によって、古来さまざまな詩的な、あるいは思想的なニュアンスが付加されてきた。（略）閑居を詩人の至高の生き方として価値づけたのは陶淵明であった。（略）また白楽天

には「閑適詩」という詩の一ジャンルがあるほどで、後述するようにわが国の詩歌に及ぼした影響は大きい（注一）。

とされるが、わが国の貴族たちが「閑居」に求めたものは、「詩の教養にもとづく趣味的なもの」で、「閑静な山里に別業を営むことが流行したのも、豊かさ、余裕のあらわれ」として中国における「閑居」の叛俗精神や批判精神が希薄になり、やがて仏教の隱遁思想が著しくなるにつれて、閑居の原型からは遠ざかり、仮構された「閑居」の生活はそこだけ動かないみやびな文学空間として作り出される（注二）。

ただしこれは中世の一つの傾向であり、「特に閑居を主題としたわけではなく、閑居しながら詠んだものの意」（注三）、「おのれの境涯というより外から眺めた世界である。（略）詩境と生活が一体となった感じはない」（注四）などと述べられるように、二十六歳の定家と三十歳の家隆にとって閑居の境地はまだ遠いものであったであろう。

また久保田淳は閑居百首の命名の背後には、「自分達の閑居への志向に対するはつきりとした自覚があった」とし、「卑位卑官を嘆く」「不遇者意識が（略）閑・寂の極まった境地を描き得たのだとしたら、そ

れもあながち無意義なものではなかった」^(注5)とする。

家隆はこの「閑居百首」の中で、

和歌のうらやふかきちかひを憑みつつ浅き汀にもくづをぞかく

(九八五・述懐)

とよんでいる。「ふかきちかひ」とは『法華経』普門品第二十五の「弘誓深如海 歴劫不思議」の法文句にあたる「四弘誓願」をよんだもので、

おしけるやふかきちかひのおほあみにひかれむことのたのもしきかな

(聞書集・二六)

などとよまれる。家隆自身も「殷富門院大輔百首」の中で「弘誓深如海」の題で歌をよんでいる。

定家は寿永元年の二度目の百首歌「堀河題百首」の中で、

あしたづのこれにつけてもねをぞなく吹きたえぬべき和歌のうら

風

(拾遺愚草員外・七五五)

とよみ、これは和歌の危機感ともよみとれる^(注6)が、同時に和歌の道へ精進しようという決意ともとれるのである。家隆の「和歌のうらや」でも、私の救いを頼みにしながらまだまだ浅学である自分であるが、和歌の道に精進しようという家隆自身の意気^(注7)を看取することができる。

また文治四年に成立する『千載集』に家隆の歌は四首取られるが、その一首が直前によまれたこの「閑居百首」から取られた、

旅ねする須磨の浦ちのさよ千鳥声こそ袖の浪はかけけれ (九六二)

であるということは特筆するべきことであろう。これらのことから「閑居百首」はもはや習作の域を脱していると考えられる。したがってこの百首は、家隆の歌風の形成上見逃せない百首と思われる。

「閑居百首」での特徴的な言葉や定家との表現の比較を手がかりに、家隆の「閑居への志向」を考えていきたい。

二

この「閑居百首」において家隆・定家両者の歌には類似する表現や発想が多く、家隆が定家の先行する作品を早くも摂取していることはすでに指摘されている^(注8)。家隆の百首を通覧すると「山里」(九一九)「しばのと」(九六六)「柴屋」(九九三)「草の庵」(九九八)など閑居の住処を思わせる語や、「待つ人」(九〇八)「わび人」(九二二)「うき人」(九四五)「うき身ひとつ」(九八二)など閑居する人を表現する語、「つらき」(九〇九)「身をすて」(九一三・一〇〇〇)「浮世をい」とひ」(九一四)「はかなき」(九五六)「定めなきよ」(九五九)などという語からは「閑居」に対する捉え方が看取できる。

定家にも「荒れにけり」(三二〇)「山ざと」(三二二)「やへむぐたしける」(三二二)「山ふかき」(三六六)「なぐさめ」(三四六)「もみちふみわけ」(三五二)「すみがまの煙」(三六〇)「しづがさ屋」(三六一)などと同じ傾向がみられる。

また家隆においては「心をそふる」(九一八)「心もおかぬ」(九三

七「心にうつる」(九三九) など「心」を用いた表現の歌が十首、「あはれ」を用いた歌が十首みられる。定家は、「うつるふ心」(三〇五)「心のわかれ」(三二〇) など「心」を用いた表現が六首がみられ、「あはれ」は二首である。

使われている語から見ると、二人ともに閑居に対する意識は似通っていると思われる。家隆の歌には「古今集」を本歌にしたもの^(注8)、後に述べる経信、西行の歌に影響を受けた歌もみられるが、これらは「閑居」を明らかに意識したものと思われる。

次に詳しく述べるように、「こめる」「とぢる」「つつむ」「もれる」などを使った表現が目立つ。「こめる」「とぢる」「つつむ」はある特定の空間を形作る語であり、「もれる」は包まれ隠されていたものがわずかな隙間から通り抜けるという意味である。このような語を用いることによって家隆は閑居という空間を表現しようとしたのではないであろうか。

三

まずは次のような「霞」あるいは「霧」と「こめ」という組み合わせの、

①春をへてなれにし色も今年より霞こめたる心ちこそすれ

(九〇四)

②立ちこむる霞にこむる桜花さらでも春の色ならぬかは

③かやり火の煙にむせふ山ざとは秋をこめたる夕霧ぞたつ

(九一一)

④あれはてて野ばらにつづく花の色をもとの籬にこむる霧かな

(九四〇)

この四首について考えてみたい。「こめ」は「深くしまう、包む」「あたりをすっかりおおう」「十分に含ませる」などの意味がある。

「霞」と「こめる」の用例は『古今集』に、

花の色はかすみ^①にこめてみせずともかをだにぬすめ春の山かぜ

(春下・九一・よしみねのむねさだ)

がある。この歌が①④の歌の発想の源にあると考えられる。

次に「霞こめたる」という使い方は『後拾遺集』に、

おもひやれかすみこめたる山ざとはなまつほどのはるのつれづ

れ

とあるが、次にあげるようにこれ以降平安末期にかけてよまれている。

あけぼのにかすみこめたる花よりもあかぬはいもがにほひなりけ

り

山桜かすみこめたるありかをばつらきものから風ぞしらする

(久安百首・二二五・参議左中将教長卿)

あびきするあこととのほるしほの浦の霞こめたるあまのよびこゑ

(同・五一〇・隆季朝臣)

杉たてる門をもいかがたづぬべきかすみこめたる三輪の山本

(同・一一〇六・上西門院兵衛)

当代歌人には、

おもひやるころやはなにゆかざらん かすみこめたる みよしのの

やま

(山家集・六三三)

山ふかみ かすみこめたる しばの庵にこととふ物はうぐひすのこゑ

(同・九九一)

春霞 かすみこめたる 山里のはれぬ心を人しるらめや

(拾玉集・一〇六・「述懐百首」)

などとよまれるが、霞こめたる場所としては「みよしののやま」であり、山深い「しばの庵」であり、「山里」なのである。

また『源氏物語』「権本」では宇治の八宮が亡くなって匂宮が去年の桜の歌の贈答を思い出し、宇治で歌を贈ったその返事に中の君が、

いづくとかたづねておらむ墨ぞめに かすみこめたる 宿のさくらを

と「かすみこめたる宿」とは墨染めの霞におおわれている宿、すなわち八宮の喪に服している宿の桜(中の君)と言って、匂宮の申し出をきっぱりと拒んでいる。

①の歌の霞がこめている場所は山深いところで、何年も春をへて慣れてしまっている色だけれど、今年からは霞ですっかり覆われているような気持ちがある、とよんでいる。

②では「霞にこむる」と「に」でうけ、立ち込めている霞、その霞だけでも春の色であるが、霞の中に隠された桜花によっていつそう春の色が増しているとよんでいる。

定家にも同じ「閑居百首」に、

雲の上の 霞 にこむる 桜花 又たちならぶ色をみぬかな

(三二六)

があり、宮中では霞に隠されてしまった桜花、すなわち自分はまた十分な官位(「たちならぶ色」)を見ないと桜によそえてわが身の不遇を嘆く歌となっている。不遇者意識をよんだものであろう。

③の歌は「秋をこめたる」は「秋を十分に感じさせる」という意味で、蚊遣火の煙がたちこめている山里に秋を感じさせる夕霧が立っている、①②の歌とは違う使い方である。

④も同様に「花の色を元の籬に十分に残して覆い隠している霧であることだ」となる。定家にも同じ「こめる」を使った歌が「閑居百首」にみられ、

いまよりの気色に 春 はこめてけり かすみ もはてぬ明ばの空

(三〇二)

夏ふかきのべを籬にこめおきて 霧 間に 霧 の色をまつかな

(三三五)

と「春を十分感じさせる気色」であり、「夏ののべの様子を籬に十分含んでおいている」とよんでいる。さらに定家は、

ほのぼのと我がすむかたは 霧 こめて あし屋 のさとにあき風ぞふく

(三四一)

とよんでいる。「あし屋のさと」は『伊勢物語』八七段を踏まえており、あたりが霧で覆われることによって、都から離れた「あし屋のさと」に思いをはせている。また「霧こめて」は、

いとどしくもの思ふやどをきりこめてながむるそも見えぬ今朝
かな
(道信集・二四 新勅撰集・秋・二七五)

と物思いの心象として霧がよまれている。西行には、

たちこむるきりのしたにもうづもれて心はれせぬみやまべのさと

(山家集・四二七・「山家霞」)

とあり、霧が立ち込めていてその下に埋もれているような山深い里に
いる自分であるが、それと同じように心は晴れないと心象を眼前の景
物で表現している。

以上のように「霞」「霧」が「こめ」る歌を見てきたが、「霞」「霧」
が「こめ」られるのは山深い場所であったり、都から遠く離れた場所
である。また「こめ」るには季節を先取りして気配を感じさせたり、
よい季節を何かに留めようとする作用がある。さらに『古今集』では、
三万山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ

(春下・九四・つらゆき)

とかくす霞が、先にあげた『古今集』九一番の歌では「こめて」によ
つて覆い隠されてしまい、立ち入ることのできない空間を作り出して
いるのである。そこで「春の山かぜ」に「かをだにぬすめ」というの
である。この歌を踏まえて和泉式部は、

あだなりと名にこそたてれ桜花霞のうちにこめてこそをれ

(和泉式部続集・五五〇)

とよんでいる。浮気者と評判になった桜花よ、霞の中に隠れていなさ
い、つまり霞によって覆い隠された、人がやってこれられない場所に隠

れていなさいとなる。

霞は人の目から景物を遮断するのであるが、「こめ」ることによって
完全に隠してしまうという作用がある。この遮断された場所こそが
「閑居」生活を送るのにふさわしい場所なのであったのであろう。

四

次に「つつむ」が使われている歌を見ていく。

ちらすなよくへもつつめ春霞しのぶの山の花のこずゑは

(九一〇)

この歌の発想の源は、

おほぞらにおほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ

(後撰集・春下・六四・よみ人も)

であろうか。初句「ちらすなよ」第二句「いくへもつつめ」と二重の
命令でよまれた歌である。初句に「ちらすなよ」を置いている歌は、
ちらすなよしのびのりにしぐれしていろにいでぬることのはぞ
とは

(重家集・一五五・「初恋」)

にみられる。初恋の歌であるから「しのびのり」とよまれるのは、
当然である。第二句「いくへもつつめ」は家隆の独自の表現であるが
似た表現として、

しばしこそ袖にもつつめなみだ河たぎつころをいかにせかまし

(教長集・六四二・「内裏十五首会に、初恋を」 風雅集・九六二)

と「袖にもつつめ」があげられる。激しく高ぶった恋の心をしばらく袖にでも包んで隠しておくとよんでいるのである。

家隆が春霞に二重の命令を使っているのは、しのぶの山の花のこずゑを包んで花を散らせるなというためである。しのぶ山は陸奥の歌枕で定家にも「閑居百首」に、

たづねばやししのぶの奥の桜花風にしられぬ色やのころと(三二七)という『伊勢物語』第十五段を踏まえた歌がみられる。しのぶ山の奥の風に知られないで残っている桜花をたずねてみたいものだと言っており、しのぶの山は桜を散らしてしまふ風も知らない山なのである。

家隆の歌は、花を散らさないように春霞に何重にも包んでおくと命令した花の梢は、しのぶ山にあるのだが、そこは霞に包まれて風さえも知らないのである。そのしのぶ山に桜がひっそりと咲いているとよんでいる。

次の歌は「とづる」を用いて閑居の境地をうまく表現している。

ささ結ぶやどのとほそのさびしさをかさねてとづる 夜半の雪 雪かな
(九六七)

「ささ結ぶ」は「草結ぶ」などと同意であろう。

ささむすぶたびのいほりのあはれにもあきとつけつる風のことゑかな
(林下集・九〇 「旅宿立秋といふことを」)

とよまれているが、粗末な宿、庵を象徴している。家隆の歌は、そのとほそはただでさえも寂しいものののに、その寂しさを「かさねてとづる」夜半の雪であるとなる。「やど」「とほそ」「とづる」が縁語とな

っており「閑寂境への著しい作品」^(注)といえよう。

「かさねてとづる」は『秋篠月清集』に、

一二三句のかみにすゑて秋歌よみける

八へしげるむぐらのかどのゆふぎりのかさねてとづる秋のやまざと
(一二二五)

にみられるのみであるが、家隆の歌との前後関係ははっきりしない。秋の山里に八重葎が茂ってただでさえも閉ざされているのに、夕霧が重ねて閉じている様子をよんでいて、そこだけが閉ざされた別世界を作り出している。

「どちる」という詞は多く「氷」とともに用いられていたが、

山里ははるのかすみにとぢられてすみかまどえらうぐひすぞなく
(興風集・二二・「寛平の御時、花の色はかすみこめてといふ心をよみてたてまつれとあるに」)

とあることから、山里は霞に閉じ込められる場所なのである。

たがさとの春のたよりにうぐひすの霞にとづるやどをとふらん
(千載集・雑上・九六二・上東門院紫式部)

この歌は詞書によると、夫を亡くして間もない紫式部に言い寄ってきた男に對する歌で、「霞にとづるやど」とは式部自身のことをさすのであり、同時に喪中をさすものであるが、実世界から隔てられた場所をあらわすときに用いられている。

また、

たびねするやどはみやまにとぢられてまさきのかづらくる人もな

し

（経信集・二六二・「山家旅情、宇治殿にて」）

と「みやま」にも用いられた。

定家は「とちる」を

山里の軒ばの梢雲こえてあまりなとじそ五月雨の空

（三三八）

と「あまりとじるな五月雨の空よ」と軽く禁止をふくんだ表現を使っている。これは逆にそうでなくとも閉じられた場所である山里を、重苦しい五月雨の空で閉じるなどということによって、山里の隔たった世界を表現しようとしたのであろう。また詠作年次は不詳だが、

秋こそあれ人はたづねぬ松の戸をいくへもとちよつたのもみぢば

（新勅撰集・秋下・三四五・式子内親王・「百首歌の中に」）

は命令であるが、家隆の「かさねてとづる」に通ずる表現である。（注10）
またほかにも、

ゆふさむみしぐるる空になるままだにたえだえこほる山川の水

（閑居百首・九六〇）

は「正治二年院初度百首」でよまれ『新古今集』にも入集された、

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかるゆきのたまみづ

（式子内親王集・二〇三・新古今集・春上・三三）

と似通った表現もみられる。

さらに家隆のこの「閑居百首」でよんだ「寂しさ」の歌は、

さびしさもながめもはず秋ぎりの竜田の山の峰の紅葉ば

（九五四）

きてみれば庭のやり水蓐せきて守る人もなき宿のさびしさ

（九八九）

で、前者は寂しさも物思いもはずに眺めているのは、秋霧にかすんで見えない紅葉であり、後者は庭のやり水がこけでせきとめられ、宿守りをする人もいない、そういう宿の「さびしさ」をよんでいる。これらに比べて「かさねてとづる」は、ただでさえも寂しい粗末な宿なのに、更に追い討ちをかけるように「夜半の雪」が降り、寂しさを倍加させているのである。

「こめる」はしまう、「つつむ」は他のものでくるむ、「とづる」はふさぐとなにかで覆い隠す、遮断して別世界を形成する語であるにしても微妙に意味が変わってくる。中でも「とづる」は外部との交渉が一切ないような閉じ込められた世界を形成する。

五

最後に「もるる」が使われた歌についてみていこう。次の歌は西行の歌を参考にして作られたと考えられる。

秋のよの麓をこむるうす霧に立ちもらさるる山のはの月

（九五〇）

小倉山ふもとをこむる秋霧に立ちもらさるるさをしかのこゑ

（西行法師家集・二六六・「鹿」）

この西行の歌は『宮河歌合』の十八番右の歌で、定家は
たちもらさるるさをしかのこゑ、まだきかぬたとまで露おく、心

ちし侍れば、猶まさと申すべし

と判じ勝とし、『新勅撰集』秋下の巻末歌となっている。

両首ともに霧が立ち込めて視覚を遮っているのだが、家隆の歌はその中からわずかにもれてくるのは月光であり、西行の歌は鹿の鳴く声なのである。家隆は同じ「閑居百首」に、

時くればこれも哀はしられけり霞にもるはるこそまのこゑ

(九一六)

とよんでいる。これも明らかに「小倉山」の歌を参考にしたと考えられるが更に、

こころなき身にもあははしられけりしぎたつさはの秋の夕ぐれ

(山家集・四七〇・「あきものへまかりけるみちにて」)

の影響もみられるのである。「閑居百首」の中には、

身をすててよしのの山にいりぬるも思ひやいでん白河の花

(九一二)

などは明らかに西行を意識していると思われる歌がある。

先に「たびねする」の歌をあげたが経信にも、

①夜をへつつ嶺の嵐はおとまざるすその虫の声はよわりて

(九五二)

やまざとのゆふくれがたのさびしさにみみねのあらしのおどろかすかな

(経信集・一四八)

②風ふく松の葉しろくおく霜のおちぬほどまで夜は深けにけり

(九六一)

はつゆきはまつのはしろくふりにけりこやをの山の冬のさびしき

(金葉集三奏本・冬・二八四・大納言経信)

などの影響がみられる。②の「はつゆきは」は二度本や『経信集』では「まきのは」であり定家にも、

山ふかきま木の葉しのぐ雪をみてしばしはすまん人とはずとも

(「閑居百首」・三六六)

と影響を受けた歌がみられ、経信は家隆、定家ともに「閑居百首」において念頭におかれた歌人であったことがわかる。家隆の歌で、西行の影響を受けたと思われる歌は他に多くみられるので、これについては稿を改めて論じたい(注1)。

さて「もるる」は、

山ざくら霞にもるるにほひこそ咲きぬとつぐるつかひなりけれ

(月詔和歌集・一〇一・藤原宗隆)

たびねせしやどのこずゑやそれならむかすみにもるる玉のを柳

(隆信集・二四・「西行上人、いせの百首とて人人にすすめ侍りしに、かすみのころ」)

など、霞が立ちこめ、そこから「にほひ」がもれたり、柳がちらつとみえたりする状況がよまれていた。西行の「小倉山」の歌以降は、

見つるかな春のみなとにうきねして霞にもるる浪のはつ花

(拾玉集・二二六九・「詠百首和歌」)

など視覚で捉える一方、

はつせ山かたぶく月もほのぼのと霞にもるる鐘のおとかな

(拾遺愚草・二一五五・「正治二年三月 左大臣家歌合 晚霞」)

春はいま冬をこめてやたちぬらん霞にもるる峯の松かぜ

(後鳥羽院御集・一一〇〇)

など霞からもれてくる対象を聴覚でとらえる歌もみられるようになる。

家隆の「秋のよ」の歌は、秋の夜、霧がたちこめて視界がぼんやりしているその中で、もれてくるのは山の端にかかっている月の光なのである。また「時くれば」の歌は、いつか霞からもれてくる春駒の鳴く声でさえも感慨ぶかいものになるだろうとなり、わずかにもれてくるものは月光であり、春駒の声なのである。両首ともに閑居生活の限られ、霧や霞でさらに閉じ込められた場所を「もるる」を用いて表現したのである。

六

以上のように「閑居百首」をみてきた。「初心百首」「大輔百首」と同様に定家の影響は濃厚である^{注12}。「閑居」は家隆にとっても定家にとっても別世界、人目から隠された世界として使っている詞から見て、「閑居」を同一の認識で捉えていると思われる。

しかし家隆は特に「こめる」「とづる」「つつむ」「もれる」などの詞で「閑居」の空間を形成しようとした。このような詞を用いることで家隆なりの「閑居への志向」と表現しようとしたのではないだろうか。

単に新しい「閑居」を題材にしたことのみならず、和歌へ対する自覚や独自のアプローチがみとれるこの百首は、定家からの影響を少し

ずつ脱却しようとした、新古今時代へと続く家隆にとって重要な百首と位置付けることができるであろう。

注1 赤羽淑『藤原定家の歌風』（桜楓社、一九八五年四月）五頁〜七頁

2 注1の八頁

3 『和歌大辞典』『閑居百首』の項参照

4 注1の三二頁

5 久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、一九七三年三月）

6 注1の「第一章 歌人としての生活 第五節 歌道意識」に詳しい。

7 神谷敏成『閑居百首』について』（『和歌文学研究』第四十二号）

8 また古歌の摂取においても、

春ふかみかれし草葉はみどりにてまた山里のひとめばかりぞ
(一九一九)

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

(古今集・冬・三二五・源宗于朝臣)

9 注1の五八五頁

10 式子内親王の歌については、赤羽淑「式子内親王における詩的空間」(『古典研究』第八号 一九八二年三月)に詳しい。

他に「とづる」を使った用例として

たたきつるくひなの音も深けにけり月のみとづる苔のとはそ
に
(式子内親王集・二七)

五月雨の雲はひとつにとちはててぬきみだれたる軒の玉水

(同・二二八)

吹き結ぶ滝は氷にとちはてて松にぞ風の声はをしまぬ

(同・三三二)

があげられる。

- 11 注1の「第二章 歌風の形成 第三節 文治期の歌風」に西行と定家についての指摘がみられる。

- 12 茅原雅之「藤原家隆の『初心百首』成立についての一考察」〔中世文学〕第四十号に詳しい。

(かわの りょう／博士後期課程三年在籍)